

陸上部女子の憂鬱。面積の小さいエッチなユニフォーム

「本当にこんなエッチなユニフォームを着ないといけないんですか？」

久坂凜花はついつい先輩たちに向かって言ってしまった。

「凜花ちゃん。気持ちはわからないでもないけど、しょうがないよ。我慢しないと」

久坂凜花は、この春、高校に入学した。

中学のときから陸上をやっている。

久坂凜花の種目は中距離だった。

中学の頃、大会でかなりいい成績をおさめて、陸上の名門高校に入学した。

名門校で大好きな陸上に打ち込める環境は、久坂凜花にとってはとてもいい環境だった。

それでも、1つだけ嫌なのはユニフォームだった。

久坂凜花が入学した H 大学付属 K 高校の陸上部のユニフォームは、かなりきわどいものだった。

ピンクのセパレート型のユニフォームで、下のボトムスは切れ込みが激しいブルマタイプだった。

股間の際まで露出するタイプのビキニブルマだ。

上の方はレーシングトップで、こちらにも隠れている面積は小さい。

さすがに胸は隠れるけど、肩や脇なんかは丸見え状態だ。

しかも、レーシングパンツの上は何もないので、おへそから胸のあたりにかけては、文字通り丸出しになる。

久坂凜花の中学時代のユニフォームは、ここまでの露出はなかった。

でも、この高校に入学したからには、学校のユニフォームを着るしかなかった。

今日は、大会に向けて、本番で着るユニフォームを着て、練習することとなったのだ。

女子更衣室で、久坂凜花はユニフォームを着た。

「いいじゃん凜花ちゃん。似合ってるよ」

先輩たちは褒めてくれたけど、やはり久坂凜花の気持ちは晴れない。

同性の女子にだけ見せるのであれば、まだいい。

でも、これから運動場に行けば、同じ陸上部の男子だっているし、他の部活の人もある。

同じ高校に通っている男子たちにユニフォーム姿を見られるのが恥ずかしかったのだ。

「でも、凜花ちゃん。恥ずかしがったりしたら駄目だよ」

久坂凜花が頭の中で考えていたことを先輩が言い当てる。

「陸上の強豪校であればあるほど、面積が小さいユニフォームを着てる。理由はわかるよね？」

「はい」と久坂凜花は伏し目がちに答えた。

陸上のユニフォームは空気抵抗を極力受けないように作られている。

女子選手は、バストの膨らみもあるので、空気が入りやすく、それによる抵抗も受けやすい。そのために、より空気が入らないような設計のユニフォームになる。

加えて、足や手を動かしやすいように、極力、布の部分は小さい方がいい。

そして、出来上がったのが、レーシングパンツ、レーシングトップのユニフォームだ。

そのことをもちろん久坂凜花も理解していた。それでも……。

陸上部の女子が全員、更衣室から運動場へと向かった。

1年生は、8人だった。

1年は、この日が初めてユニフォーム姿を披露することとなった。

「おおーっー」

出てきた女子部員たちを見て、待ち構えていた男子部員たちが歓声を上げた。

久坂凜花たちにとっては、先輩たちや同学年の男子たちの好奇な、性的な視線を一段と浴びることとなった。

「なんか、やっぱ嫌だね」

「そうだね」

久坂凜花は同じ1年の女子とそんな言葉をかわした。

「ねー、なんか写真撮ってる人いるんだけど」
別の女子部員がそう言った。

指を指したその先に、大きなカメラを構えて、女子部員たちを撮っている男子生徒がいた。

「ちょっとー。何撮ってるんですか」

陸上部の３年の女子が大声でそう言った。

「僕たち写真部です。今日は、部活動の様子を撮らせてもらう日ですので、撮ってます」

今日は、写真部が学校のホームページに載せる、各部活動の写真を撮る日だった。

久坂凜花は、どうしてわざわざこの日なんだと、心の中で舌打ちを打った。

その後、露出の激しいユニフォーム姿で、そのまま練習をする。

こんな格好で、女子たちを性的に見るなというのは無理がある。

逆にこれで興奮しない奴は、男じゃないだろう。写真部の男子たちは、まだ陸上部のことを撮っていた。

それに、必要以上に女子ばかりを狙って撮っている。

男子も同じくらいの部員数があるのに、ほとんどの時間、女子にカメラを向けている。

その他にも、同じ運動場で活動している、サッカー部や野球部の男子たちが、明らかに久坂凜花たち、陸上部女子部員を見ていた。

中には、スマホを取り出して、撮影している者までいる。

久坂凜花はたまらず、先輩たちに言った。

「あそこの、サッカー部の人、こっちにスマホのカメラ向けてきてますよ」